

あたしだけがよくわかんない「さみしい」につつまれている気がしたのはいつからだろう。パパがいなくなつちやつた日から？ママが笑わなくなつてから？

あー、なんかまた、涙出てきちやつたな。ぼろぼろぼろぼろぼろぼろ。泣きたくないのに、泣いちやう。この頃ずつとそう。いやだな。

あたしが学校から帰ってきて、ちょっとのあいだ、自分の部屋のベッドにうずくまつていろんなこと考える。そして考えれば考えるほど、涙が止まらなくなるんだ。でも、いつまでも泣いていられなくて。ママが帰ってくるまでにはちゃんとしてなくちゃいけなくて。

あたしはある程度泣き済んだら、すぐにベッドから起き上がって晩ごはんの支度。これはもう、この頃の日課になつちやつたな。

晩ごはんができたのを見計らつたかのように、ママが帰ってきた。ママは保険会社に勤めていて、いつもは結構遅くて十時とかに帰つてくるのに、今日は七時に帰つてきた。

「早かつたじやん」

「今日はちよつとね。あんたに話したいことがあつて」

ママの顔は珍しくはにかんでいた・その顔が少し気持ち悪かつたな。

「もうちよつと待つてて。昨日のみそ汁、温め直しちやうから」

「うん」

そういった瞬間、もう一つ足音がした。

「……お邪魔します」

そこには見慣れない、背の高い、男の人があたふたしていると、ママの部屋から声がした。

「あ、そこらへん適当に座つて？ 麻綿、なんか飲み物出してやりなさい」

茫然と立つてゐるあたしをママは無理やり動かす。あたしはコップを食器棚からだして、その人のためにお茶を注ぐ。その人は「お構いなく」と言いながら、あたしの顔を見た。そのちよつと笑つた顔がすごく気持ち悪かつたということだけは覚えてる。

そこからだなあ、この人に嫌悪感もつたのは。

そんなことを知らないその人は、あたしがあげたお茶をおいしいといつて喉を鳴らしながら飲んでいた。そして、その人の方から話しかけてきた。学校楽しいかとか、部活何やつてんのとか、好きな人いるのとか……。あたしは全部ぶつきらぼうに答えたつもりだけど、着実に距離を縮めていこうとするその人の態度がますますキモくてイヤになつた。

「あ、麻綾。この人にも晩ごはんあげて。大丈夫でしょ？　お米とか」「……わかつた、大丈夫だよ」

「できたよ」

あたしは急きよ三人分になつた晩ごはんを並べて、ママを呼んだ。この男の人と一緒に晩ごはんを吃るのは本当にイヤだったけど、もう、どうしようもない。三人で一緒にいたときすつて言つたの何年ぶりだろう？

食事、初めは三人とも黙つて吃べた。何とも言えない空氣にあたしは早く逃げたかつた。そんな空氣を壊したのはママの言葉だった。「あたし、この人と再婚するから」

明らかに空氣が変わつた。というかこの男の人がここに來た時点でそんなことだらうといふのは感じ取つていたけれど、こうやつて口にされると言葉が重くのしかかってきた。ママがニコニコしている男の人の紹介をした。

「高橋純也くん。会社の私の後輩よ。もつとはやくあんたに話そうと思つてたんだけど、いろいろ忙しくて今日になつちやつた。隠してたわけじやないのよ？『ごめんね？』

やつぱり今日のママの顔は気持ちが悪い。いつものママの笑う顔じやない。あたしはママから目線をそらせた。でも、ママは話を続ける。

「今回こうやつて再婚することにしたのは、前のお父さんがいなくなつてから、もう半年経つけど、あんたにもいろいろ迷惑かけちゃつたし、今だつてご飯作つてもらつちやつたりして、家のこと全部任せちゃつてもらつてるじやない？　やつぱりそれは麻綾にもちやんと勉強してほしいし、なにしろそんなの普通の家庭じやないわ！　だからちやんと家に「お父さん」をいれて、そしたら私も家事はちやんとやるから。また、一緒にやり直そ？ね、あなたも一四歳なんだし、わかつてくれるわよね？　ね？」

あたしはママの話にとりあえずはコクンと頷いておいた。すると、今まで話を聞いていた男の人が口を開いた。「よろしくね、麻綾ちゃん」

あたしは晩ごはんを食べ終えると自分の部屋のベッドに潜り込んだ。さつきの泣いてた時とは違う感情。悲しみは全然ない。むしろ怒り。あたしは怒つてる。なに？　あんなキモい人とこれから過ごすの？　イヤだ。あんな人があたしのパパ務まるわけないよ。バカなんじやないの？　あたしのパパのこと何にも知らないくせに。何が「麻綾ちゃん」だよ。気安く呼ぶなよ。の人、絶対あたしにやさしくしない。あたしわかるもん。包み込んでくれるようなやさしさ、の人にはないもん。最初からママが目当て。あたし、捨てられるんじやない？　きっとそう。あたしは捨てられる。

あの人と再婚しちゃダメってママに言つても、どうせ怖い顔をして、強引に再婚するの。

あたしには、本当に居場所がなくなっちゃったんだな。先週、学校の先輩にはフラれたり。
もう、どこにも、ないんだな。あたしがいて良いところって。あ、また、泣いてるなあ。

もう、どつか行こう。ママも男の人も先輩もいないところに。「パパ」を探しに行こう。ば
いばい、ママ。あたしはもう、あなたの娘ではありません。

家から逃げ出した夜は寒かった。お金もないし、どこに行くのかもわからない。こんな
夜遅くに街を出歩いたこともないから、不安になっちゃうあたしがいた。今日はどこで泊
まろうかな。満喫？　だからお金ないって。マック？　あんな暖房利きすぎた暑いところや
だ。じやあ、どこに行くの？　わかんない。一四歳の彷徨つてる姿つておかしいよね。自
分の周りの大人がいやんなって、いつときの感情で飛び出してさ。で、どこで何していい
んだかわからなくなっちゃって。結局、また大人に助けてもらうんでしょう？　あー、いや
だいやだ。これだから子どもはいやだ。で、なにが一番いやだって、そんないやな子ども
を演じてんのがこのあたし。

まあ、そんなことはどうでもいいの。パパ、早く来てよ。あたしもあの家から抜け出
したんだから、パパと一緒にだよ。ねえ、だっこしてよ。寒いから。



遊びのつもりだった。

いつもの時間に、いつもの場所に、いつもの連中と一緒にいる、いつもの光景。そこに
ただ女の子どもがいただけだ。そのこどもに話しかけてみた。子どもを怯えさせておもし
ろがりたかった。だけど子どもは、体は震えていたが、毅然とした態度だった。
子どもは麻綾と名乗った。歳は十四だという。思った以上に子どもだった。俺を怖がる
ことなく、眼をくりくりさせて、まっすぐ俺の方を見つめる瞳に、ほのかな、極めてほの
かな好意と、強い嗜虐心が生まれた。

「おい」

俺は後輩の一人を呼んだ。

「はい、なんすか？　その子ども」

後輩は子どもの顔を見ていった。

「持つて帰る」

「は？」

「持つて帰る」

「先輩何言つて……」

「持つて帰るつってんだよ！　早く車出せよバカ！」

慌てふためく後輩を尻目に、子どもに「行くぞ」といつてついてさせた。コクンと頷
くとてぐくてついってきた。

後輩たちが、俺のことをとても心配そうに見てる。中には楽しそうに見てるやつもいたが。

車の中は当然ながら異様な光景だった。女を乗せてるわけではない。子どもを乗せているのだ。そして、この子どもは車に乗ってからずっと前を向いているばかりで、何にもしゃべらなかつた。この重々しい空氣がある意味新鮮だった。しかし俺も俺でいろいろ聞きたかった。

「おい」

そういうと、子どもは黙つて俺の方に顔を向けた。

「お前、怖くないのかよ」

「全然」

「全然つて……。今何されているのかわかつてんの？」

「誘拐」

「だつたら！」

俺は左足で子どもの右ひざを蹴つた。「もつと誘拐されているようにしろよ！ 怯えろよ！ くそが！」

子どもは一瞬痛みに耐える顔をしたが、すぐに元に戻つた。これじゃあ、誘拐のしようがない。つまんねえ。俺はさらに怒つた。

「もういい。わかつた。家に着いたら覚えとけよ。そんとき泣き叫んだつて誰も助けてくれんねえぞ？」

「それでいいよ。ご飯食べるのとトイレだけさせてもらつたら、あとは何でも貴方のいうこと聞くから」

可愛げがない、このくそアマ。俺は左手でグイッと子どもの頭を引っ張つた。子どもは少しだけ悲鳴を上げた。

「さつきからうるせえんだよお前。黙れ。な？あと、俺のことはパパと呼べ」

子どもは黙つて俺の瞳を見つめた。車の中は再び重々しい空氣が纏つた。



「パパ」はパパにそつくりだつた。眼も指も強引に引っ張られた感じも。あれ、あたしこの人に誘拐されてるんだよね？ なのに……なんで？ わからない安心感。あたしこの人が新しいパパならよかつたのにな。

「パパ」のおうちは独り暮らしの割には広くて綺麗だった。「パパ」はすぐにお風呂から上がると「パパ」が立つていた。

「これ。タオル」

「……あ、ありがとうございます」

あたしだって中学生だし、あまり他の人に自分の裸を見られたくないからたけど、「パパ」の前では、もう、どうでもよかつた。「パパ」はあたしの裸を見て、何にも言わなかつた。「パパ」は自分の服を渡してきたけれど、あたしにはとても大きかつた。「パパ」が初めて笑いながら、「服買わなきやな」と言つた。

「パパ」は横に座るよう促した。その瞳は車の中の怖い「パパ」ではなかつた。

「お前、お父さんとか、お母さんとか、いねえのか?」

「お父さんはいない」

「なんでだ」

「お父さんの浮気」

「いつからだ」

「半年前から」

「お母さんはどうしてる」

「……今日、いなくなつた」

「お父さんは好きだつたのか」

「……うん」

今日のことと、あの時のこと思い出しても涙が出て来ちゃつた。

「そうか。俺も両親は小さい時に死んだんだ……」

そういうと、「パパ」はあたしにキスを迫つた。これで二回目。一回目はパパ、二回目は「パパ」。

「パパ」はそのままあたしの舌を絡ませたり、乳房や太ももをまさぐつた。それはパパの時も一緒だつた。だからかな、なんかちよつと安心した。そのあとのことはあんまり覚えていない。次の日の朝にちよつと服が乱れていただけだつた。でもその時久しぶりにまたたりとした気分になつた。

夢を見たの。パパがいなくなつた時の夢。学校からおうちに帰る途中に、パパがママじやない女とイチャイチャしていた。その女の顔が化粧でとても汚かつたのがすごく印象的だつた。その姿を見たとき、あ、パパはあたしから離れていくんだと思った。ママよりも誰よりもあたしから。そして別の日にママに浮気が発覚して、また別の日にパパとお別れになつた。そのお別れの日、パパはあたしを優しく抱きしめた。それが最後のパパの指の感覚だつた。

「パパ」とまつたりするのは、最初の日ともう一日あつた。その日も夢を見た。それはまだ浮気が発覚する前に一回だけ、パパに抱かれた日のこと。あたしはまだその時は小さつた。身体も心も。

「なにしてんの、パパ?」

「いいから、黙つてなさい」

「黙つてつて……あつ……ちょっと、ど」「さわってんの？」

「黙つてなさい！」

「んつ……うつ」

頭から火照つっていく。もうあたし自身の力じや何にもできなかつた。その時があたしは中学校に上がつたばかりだけど、いけないことしてることぐらいは分かつた。でも、いつも優しいパパがその時はもつと優しかつた。でも瞳だけはちょっと怖かつた。パパの顔をずっと見ていたらあたしも息が荒くなつてきた。口呼吸になつた。パパやめて。本当にあたしなんにもできないから。怒らないし、逃げないから。パパやめて。それ以上はダメだよ。でもパパ、パパ、パパ……！



いつまで経つても麻綾が起きてこない。あいつ、もう、五日目にしてこの生活に慣れやがつたな。

「麻綾。いつまで寝てんだよ、朝だぞ」

「ふん……ん」

「ほらいつまでもぐでっとしてねえで。さつさと着替えろよ。朝ごはんできてんだよ」

「ん……おはよう、パパ」

「うん、おはよう」

麻綾は目をこすりながら起き上つてきた。昨日の夜の麻綾は最初のころよりも女らしくて、こんな中学生に興奮してしまつた。ばからしい。急に始まつた共同生活も楽しくなつてきたじやねえか。普通に生活費とか考えるし。あとはこいつの学校とかどうしよう。でもそんなどうでもいいか。俺の女だ。俺の好きなようにする。

「いただきます」

「召し上がり」

麻綾のために作つたスクランブルエッグとトーストとワインナー。

「美味いか？」

「うん！」

こんな子供の元気な声と無邪気な笑顔によくわかんない感情が働いている。俺も歳を取つたのか。

なんか最初は嗜虐心とかばからしい感情とかわいてたけど、両親がいないやついじめてたつてしまふがない。いつかがくるまで俺が育てる。さて、今日はどこに遊びに行こう？

そういうやこんな会話をしたことがある。

「怖くねえのか？ 僕が」

「全然！ だつて優しいもん」

「そりゃ。俺は優しいのか」

「そう。だからずっとパパになつて！」

「……わかった」

「もう、あたしにはおうちないもん」

その時麻綾が初めて俺の前で泣いた。一番かわいかつた。俺は思わず抱きしめた。俺がこいつをなんのために誘拐したのか、もう、わからなくなつた。



七日目の朝だつた。いつも寝るときは「パパ」の隣、「パパ」の腕枕。今日もそんなふうにして寝てたら、呼び鈴が鳴つた。「パパ」が出たら、そこには四人の警官がいた。「パパ」が逮捕されるのだ。「パパ」は警官の問いかに冷静に答えて、もう一人の警官が私に向かってやつてきた。

「大丈夫かい？」

「は、はい」

「痛いとこないい？」

「ないです」

「よし……九時十分、保護」

何が「保護」だ。あたしはただ残されるだけなのに。

あたしの「パパ」はまたどつか行つちやうんだ。あたしがまた居場所を見つけた瞬間どこかに行つちやうんだ。あたしは今度どこに行けばいいの？ 誰に抱かれればいいの？わかんない。パパの温もりを誰に補えばいいの？ パパの温もりを求めるのはいけないことなの？ 犯罪なの？ あたしはこんなのがいや。ただそれだけなのに……。

「パパ……！」

あたしは出せる声を全部出して叫んだ。

「また、逢えるよね？」

「パパ」は何にも答えてくれなかつた。でもあたしはあきらめない。必死に警官の制止する手を振りほどいて、もう一回叫んだ。

「パパ！ 大好き！」

周りの警官たちはそんなあたしを見てとても驚いてたけど関係ない。あたしはパパ以外の初めて好きな人に精いっぱいの好きを叫んだ。伝わってくれるといいな。愛なんかわか

らないから、ただ、好き。



取り調べをされている時の俺はいたつて冷静に務めた。どう考へても、中学生と今年で二五になる俺が肉体関係を持つのはおかしいし、いつきの感情で誘拐したのは非難されることだ。でも、これだけはどうしても伝えたかった。それはあいつの今後を考へてほしつてこと。あいつは保護されても帰るところがない。いや、実は知つてゐる。後輩から聞いた。親がちゃんといふことを。しかしその親はこれからあいつをしつかり育てるのだろうか。そこだけが気がかりだ。だから、警官に被害者及びその家族に言うことはないのかと言わされたのでこう答えた。

「あいつの涙を、誰かちゃんと受け取つてやつて欲しい……」

△▽